

東野圭吾

鳥人計画

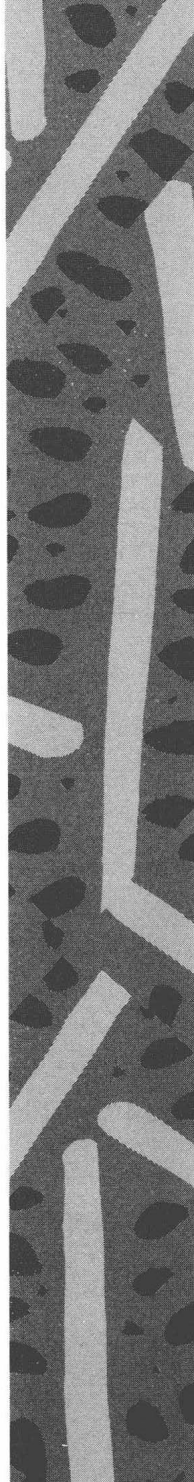
06
S
ed
06



鳥人計画

東野圭吾

新潮社



●新潮ミステリー倶楽部特別書

のけいご ●印刷・1989年5月

佐藤亮一 ●発行所・株式会社新潮社・

振替東京4-808/電話・業務部0

66)5411 ●印刷所・東洋印刷株式

価格はカバーに表示してあります ●乱丁・

係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替

© Keigo Higashino 1989, Printed in Japan

下ろし ●鳥人計画 ●著者・東野圭吾・ひがし

20日 ●発行・1989年5月25日 ●発行者・

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71/

3(266)5111・編集部03(2

会社 ●製本所・加藤製本株式会社 ●

落丁本は、ご面倒ですが小社通信

えいたします。

ISBN4-10-602710-0 C0393

動 計 複 逮 解 警 事 前	目
機 画 製 捕 明 告 件 兆	〈鳥人計画〉
276 253 200 155 103 59 9 5	次

装 装
画 幀
空 平
山 野
基 甲
 賀

鳥人計画

前 兆

それは、とりたてて記憶に残るほどのことではなかった。その場にいた者が少しばかり奇妙な印象を受けた程度だ。

昭和六十二年三月、宮様スキージャンプ大会での出来事である。

時折小雪が舞い、風向計がくるくると向きを変え、ジャンパーにとっては読みにくいコンディションだった。

「二十一番、深町和雄君。日星自動車」

アナウンスの声に続いて、ブルーのワンピースを着た選手がゲートからスタートした。

特に目立たない選手である。試合で上位に入ったこともなかった。その選手がクローチング・スタイルで滑り降りてくる。

そして踏み切った。

と同時に、カンテ（踏み切り台）横のコーチャーズ・ボックスにいた何人かの監督やコーチたちが声を出した。それは「やばい」であったり、「あれっ？」というものであったり、ごく単純に声

を漏らしただけのものであつたりした。

いずれにしても、深町選手のジャンプに対して皆が同じ判断を下したことは間違いない。

彼の身体の動きは明らかにおかしかった。飛び出したあと、スムーズに飛行姿勢に移行していない。ゼンマイ仕掛けの人形が壊れたように、不自然な体勢のまま空中で一瞬停止したのだ。

「ああ」と叫んだのは深町選手自身だった。両手をばたつかせ、狙撃された鳥のようにもがきながら落ちていった。

彼の身体はランディング・バーンに叩きつけられ、そして転がった。ブルーのワンピースがみるみるうちに雪にまみれていく。

しばらく転がったあとで停止し、彼はむっくりと起き上がった。板を外して歩きだす。怪我はないようすで、見ていた者もとりあえずほっとした。

「無事らしいぜ」

コーチャーズ・ボックスの連中も、トランシーバーで状況を聞いて安堵した。ボックスからはランディング・バーンが見えない。

「何だったんだろうな、今のは？」

誰かがいった。

「さあ、わけのわからないサツツ（踏み切り）だったな」

「タイミングは良かったんだけどな、突っ込みすぎたのかな？」

「深町か。最近はまだまあ調子を上げてただけだな。力んだんだろう」

彼の転倒について交わされた会話はこの程度だった。ジャンプ競技に転倒はつきものである。コーチや監督たちは、間もなく彼のことなど忘れてしまう。皆、自分のチームの選手のことと頭がいっぱいなのだ。

選手が次々に飛んでいく。宮の森シャンツエは、いわゆる七十メートル級ジャンプが行われるノーマルヒルだ。八十メートルを越す飛行が見られれば歓声がある。

三十番の選手がスタートした。やはり別に特徴のない選手だった。三十六度の急斜面を滑り降りてきて、十一度の踏み切り台に突入する。

が、彼が踏み切った直後、またしてもコーチャーズ・ボックスで声が上がった。彼の不自然な動作は、先程の深町選手と全く同じだった。スムーズに連続しない、ぎくしゃくした動きを見せた。

そしてこの三十番の選手も墜落したのだ。

これもまた、特に話題になることもない。

ただ、この選手もやはり深町選手と同じ日星自動車の所属だという点が、コーチャや監督たちの気をひいた。

「気の毒に。杉江さんも頭が痛いことだろうな」

あるコーチャがボックスの端にいる杉江泰介の方を覗きみた。この杉江という男が日星自動車スキー部の監督なのだ。彼は今、眉間に深い溝を刻んで、カンテのあたりをじっと見つめている。

「二度あることは三度あるっていうからな。次の島野にプレッシャーがかかっているんじゃないか」冗談めかした口調で誰かがいった。島野というのは、日星自動車に所属する、もう一人のジャンパーだった。

その島野の順番が来た。アナウンスが流れ、カンテ横のシグナルが赤から青に変わる。

コーチャーズ・ボックスからは、各チームのコーチャや監督が、スタートの合図を選手に出す。杉江泰介は厳しい顔つきで右手を上げ、そして下ろした。

いい風だった。ちょうど向かい風が変わったところだ。

ところが――。

島野の飛び出しは、その前の二人にも増して異常なものだった。踏み切りで伸びたはずの足がまた縮み、それが中途半端な状態で止まったまま、彼の身体は空中にほうり出されたのだ。

七十メートルよりもはるか手前に彼の身体は落下した。雪煙を上げながら転がり落ちていく。

今度はもう誰も何もいわなかった。お互いの顔を見合わせたただけだ。ただ一人杉江泰介だけが、頬の肉をひきつけてリフトに向かった。

日星自動車の三人のジャンパーが、揃って異常な墜落をしたわけだ。

天候に異変はない。突風が吹いたわけでもなかった。この日転倒したのは、彼等三人だけである。ジャンプの試合は、各自二本ずつ飛び、飛距離点と飛型点の総得点で競う。この日、日星の三人のジャンパーは全員二本目を棄権した。

プレッシャーによる連鎖反応だろうと皆が解釈した。

それ以外の理由など、誰も思いつかない。

そしてこの事件は、少し変わった出来事として、一部の人間の記憶にのみ残ることになる。

事件

1

目の前を何かが横切った。

杉江夕子は思わずブレーキを踏み、ハンドルを切っていた。雪道ではやってはならない操作で、案の定タイヤが滑り、車体がスピンしかけた。だが運よく車は少し斜めを向いた程度で、道路の中央に止まった。対向車も来ていない。夕子はふうつとため息をついたあと、再び車を発進させようとした。が、この時になってエンストしていることに気が付いた。運転はあまり得意な方ではない。スターターを二度回すと、何とかエンジンがかかった。おそろおそろ車を動かしてみる。軽四とはいえ四輪駆動だ。何事もなかったかのように進みだした。

キタキツネかもしれない——さっき現れた小動物のことを彼女は思い出していた。大倉山の方には、キタキツネが来る店という看板を上げた茶店がある。

曲がりくねった雪道を、夕子は慎重に進んだ。すれ違う車も、後から追ってくる車もなかった。夕子の車の前には、何本かのタイヤの跡が重なり合いながら伸びている。その中に一際新しい線が二本あるのを見て、彼の車に違いないと彼女は思った。

最後のカーブを曲がると、前方に通用門が見えた。通用門の左半分は閉じられていたが、右半分は車が通れる程度に開けてあった。夕子は少しスピードを緩めながら、この門を通過した。

ハンドルを右に切ると、間もなく白く巨大なスロープが夕子の前に姿を現した。七十メートル級ジャンプ台、宮の森ジャンツェだ。

右側に札幌オリリンピックの記念碑と管理事務所が並んでいる。夕子はその中間のあたりに車を停めた。

そこにはすでに一台のワンボックス・ワゴンが停まっていた。白い車体の側面に、原工業スキー部と書いてある。中には誰も乗っていないかった。

夕子は車から降りるとマフラーを首に巻いた。息を吐くと白い塊になって飛んでいく。午後になるとこのあたりは風が強くなるのだ。だからジャンパーたちも午後に飛ぶことは敬遠する。

管理事務所の窓を覗くと、室内の灯りは点いていたが、いつもみる管理人の姿はなかった。彼女はハーフ・コートのポケットに両手を突っ込み、ゆっくりとジャンプ台に近づいていた。曇り空ではあるが雪面がやはり眩しい。掌を庇にし、改めてジャンツェの全貌を眺めてみた。

下の方は広く平坦だが、上に向かって少しずつ傾斜を増していく。また幅も狭くなっている。そして中程に一段高くなったカンテがあり、その向こうに、さらに急角度で空に伸びていく細いアプローチ・バーンが見えた。

スタート台のところで夕子は目を止めた。そこに彼がいたからだ。白い背景にブルーのワンピースが鮮やかだ。

飛ぶつもりなのだろうか、と夕子は少し疑問に思った。こんなふうにジャンパーが一人で飛ぶなんてことは、ふつうではめったにない。

夕子がそのまま見上げていると、スタート台の彼が小さく右手を上げたように見えた。遠くてよ

くわからない。それでも彼女は手を振って応えてみた。

彼はそのままスタートした。やはり飛ぶつもりだったのだ。クローチング・フォームを組んで滑り降りてくる。そして彼の姿が一瞬カンテの向こうに隠れたかと思うと、風を切って飛び出してきた。

変だな、と夕子はこの瞬間思った。いつもの彼の飛躍ではなかったのだ。無論素人の彼女にジャンプの優劣を述べることはできなかったから、これは彼女の直感というべきだろう。

この直感が当たった。

彼は彼らしくもない不格好なランディングをすると、何かに苦しむように身体を丸めて滑り降りてきたのだ。そしてその速度が充分に緩まないうちに、激しい勢いで転倒し、雪煙をあげた。

スキー板とブルーのウェアと白い雪が入り乱れ、やがて停止した。

「楡井君」

夕子は叫び、駆けだしていた。沈黙のシャンツェに、風の音だけがした。

2

昨日行われた一九八九年度H T V杯ジャンプ大会の模様を、佐久間公一は比較的正確に記憶している。昨日は休みで、一日中テレビを見ていたからだ。三十歳を過ぎているがいまだに独身で、たまの休みといってもやることがない。佐久間自身はもちろんジャンプの経験はないが、見るのは好きだった。

大会は宮の森シャンツェで行われた。快晴でやや向かい風の、絶好といえるコンディションだ

った。

往年の名選手でもあるテレビ解説者は、今日の試合は原工業の楡井明を中心に展開するだろうと予想していた。このところの楡井の活躍ぶりには目を見張るものがある。それは単に彼の調子がいというだけでなく、彼のジャンプには従来の日本選手の枠を超えたようなところがあるのだと解説者はいった。

「例えていうならば、和製ニツカネンというところですか？」

H TVのアナウンサーが訊いた。

「そう。まさに和製ニツカネンですね。そのぐらいの可能性を秘めた選手です」
解説者は力を込めていった。

マツチ・ニツカネン——このフィンランド生まれの鳥人の名前をウインター・スポーツ界で知らない者はいない。サラエボ五輪九十メートル級で金、七十メートル級で銀を取ったのに続いて、カルガリでは新種目の団体戦を含めて三つの金メダルを獲得した。ワールド・カップでも驚異的な勝率を示し、目下のところ向かうところ敵なしの感がある。百年に一人の選手といわれ、他の選手はナンバー・ツールの座を争っているだけという状況だ。

楡井明はその鳥人に匹敵する才能を秘めているという。このところ不振の日本ジャンプ界にとっては、じつに夢のある話題だった。そして事実楡井は、今シーズンの国内大会では負け知らずだった。海外遠征でも、再三入賞を果たしている。残念ながら優勝はまだないが、二位というのが二回あった。

それだけの実力者だったから、この試合でも解説者が楡井の勝利を予言しても少しもおかしくはなかった。そして結果はまさにその通りになった。

他の選手がよくて八十メートル前後に落ち着いているのに比べ、楡井だけが九十メートルライン

まで飛んでいった。彼の飛躍は、テレビ画面で見ているだけでも、はつきりと違っていた。飛行曲線の大きさが違う。落下するのではなく、本当に飛翔するように見えるのだ。

二回目のジャンプも結果は同じことだった。楡井が一回目にK点（極限点）を越えたことで、スピードが出すぎないようにスタート台が下げられたのだが、このことが彼にとつてさらに有利に働いた。充分なスピードを与えられずに他の選手が失速していく中、楡井だけは一回目よりも二メートルほど飛距離が縮んだだけだった。着地してテレマーク姿勢をとった後、彼は小さくガッツポーズを見せた。

ふうん、日本にもすごい選手がいるんだな——佐久間はぼんやりとテレビ画面を眺めていた。それが昨日のことである。

そして今日、その楡井明が死んだという知らせが入った。しかも死因に不審なところがあるという。

そこで佐久間たちが出かけることになった。

彼は札幌西警察署刑事課捜査一係の刑事だった。

「つまり楡井さんの方から呼び出しがあつたわけですね」

佐久間の質問に、杉江夕子はうなだれた首をさらに深く折った。長い髪が肩から流れ落ちた。

宮の森シャンツェの管理事務所を借りて事情聴取を行っている。佐久間と新美という若い刑事が杉江夕子を担当した。夕子は南区の幌南スポーツセンターに勤めているらしい。

年齢は二十六ということだったが、見た感じはもう少し落ち着いている。くつきりとした目鼻立ちをしているが、どこか古風な雰囲気もある。涙のあとは消えているが、目は充血したままだった。彼女の話によると、今日の昼すぎに楡井から電話がかかってきて、一時半頃に宮の森シャンツェ

に来てほしいといわれたらしい。用件については訊かなかった。楡井と彼女とは数か月ほど前から交際していて、こういうことは何度かあったらしいのだ。

「あなたが到着したのは、実際には何時頃ですか」

「一時半よりも少し早かったと思います。二十五分ぐらいだったかもしれません」

「待ち合わせの場所は、いつもここですか」

「いいえ。シャンツェで会ったことはありませんでした」

「じゃあちよつと変だなと思ったでしょう」

「少し思いました。でも深くは考えませんでした」

まあそうかもしれない、と佐久間は思った。ジャンパーがジャンプ台で会おうというのだから、不自然というほどではない。

楡井が倒れた状況については最初に聞いている。不思議な状況だというのが佐久間の印象だった。ジャンプした直後に苦しみだし、倒れたとは――。

彼女からの知らせで、間もなくジャンプ・チームの人間が医者連れてやってきたらしい。医者は夕子の話と楡井の状態を見て、すぐに警察に連絡する必要があると判断した。中毒死の疑いが濃厚だと判断したからだ。しかもかなりの猛毒だと見抜いた。

それで佐久間たちが呼ばれることになったのだ。

「昨日は楡井さんとお会いになりましたか」

うつむいた夕子の横顔を覗くようにして佐久間は訊いた。

「はい。あの……昨日はここでゲームがありましたから」

「知っています。H T V 杯でしたね。楡井選手の圧勝だった」

「そのゲームの後で会いました。食事をして、それから少しお酒を」